説教20200419　イザヤ26：19　ヨハネ20:19-31 202 238 151

「幸いに至る道」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　先週のイースターの説教で、私たちは主のご復活に際しては、全てのことが受身としておこされたという話を聞かされました。私たちは主イエスによって立ち上がらせられ、生きて働いておられるキリストを告げ知らせるものへと変えられました。私たちは教会に集められ、キリストの体の部分に入れられて、それぞれの仕方でキリストに奉仕する者へと変えられました。主イエスはこの地を去られている間、教会にその救いの業を託されたのです。ここまでのことは皆さま何度も聞いてよく承知されていることと思います。

　しかし今日は、あのトマスのことを語ることになりますし、私たちが行う奉仕、業の能動的な面に焦点をあててお語りしていこうと思います。

　さて私たちは今日のこの世の歩みにおいて能動的であることを幼い頃から学校などで推奨され、能動的な大人になることを世の中から求められています。自然、これこれのことをやり遂げれば素晴らしいとか、みんなの役に立って有益だとか言う考え方に縛られるようになっています。しかしよくよく考えてみれば受動的であることと能動的であることはそんなに、さいぜんと区切れるようなことではないのではないでしょうか。能動的に活躍しているようにみえる政治家が実は虚栄心に突き動かされて　いるだけ、などということはよくみられることです。

　今日の聖書箇所では、その受身と能動のつなぎ目がいかにあるべきか、ということが主イエスによって示されています。私たちはどちらかと言えば受身の話をされるより、能動の話をされる方が、受け取りやすくてうれしく感じるのではないでしょうか。本日の聖書箇所に聞いてまいりたいと思います。

　今日の聖書箇所の出来事はすべて、弟子たちがカギをかけて閉じこもっていた家の中でのことです。弟子たちはユダヤ人を非常に恐れておりました。なぜかと言いますと、自分たちが、十字架刑にあったイエス様の仲間であることが知れわたっていましたし、またユダヤ人たち、殊にファリサイ派や律法学者たちが、イエス様を殺そうとして執拗に追い回していた様を知っていたからです。次は間違いなく自分たちが狙われるということを弟子たちは身につまされて感じていたのです。だから家の戸口に固く鍵をかけて、息をひそめながら家の中に閉じこもっていたのでした。弟子たちはかたくなに部屋の中に留まり続けていたのでしょう。そのような中にイエス様は来られて彼らの真ん中に立たれたのでした。イエス様が来られて彼らのかたくなさはいっぺんに、ほどかれたのではないでしょうか。イエス様は「あなた方に平和がある様に」と言って、御自分の手とわき腹とをおみせになりました。その時、弟子たちはイエス様をみて、喜んだと書いてあります。ただ素直に喜んだのです。それは子供が愛する親に再会した時の心情に似ているかも知れません。

　イエス様は重ねて「あなた方に平和がある様に」と言います。そしてこの時続けて「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と言われました。この時弟子たちはイエス様からそれぞれに召命をうけて、能動的に働く者へとされたのです。しかし、イエス様が弟子たちにお与えになったのは御言葉だけではありませんでした。イエス様は彼らにフーと息を吹きかけられ聖霊をお与えになったのです。このように聖霊を受けた弟子たちには、罪とは何か、が分かったのではないでしょうか。

自分たちを殺そうとしているユダヤ人たちは確かに罪が深い。しかしその同じ罪が自分たちを追いかけ自分たちをも、かたくなにしている。罪というのは一人に留まるものではなく、いわば伝染していくものだということを。

　私たちは、こういった罪のことを主イエスから教えられない限り、又主イエスの愛の内にとどまっていない限り、気づけず、又覚えていくことは出来ません。

　さて２３節は本日の聖句にも挙げさせていただいた有名な聖句ですが、お読みします「誰の罪でも、あなた方が許せば、その罪は赦される。誰の罪でもあなた方が赦さなければ、許されないまま残る。」素晴らしい聖句です。これを私たちが行って行けばまことに御心に適うことです。しかし、これを行うのは簡単なことではありません。が、今、少しギリシャ語の原義に立ち返って、その意味を説明し、これを実行する敷居を出来るだけ低いものにしたいと思います。この聖句をよりギリシャ語に忠実に訳せば次のようになります。「誰の罪でも、あなた方が手放せば、その罪は赦される。誰の罪でもあなた方が執着すれば、執着されたままである。」ヘブライ人への手紙での表現を用いるならば、ここに絡みついてくる罪の有りようが描かれています。一昔前まで泥という漢字をナズムと読んで、泥沼に足を取られ、からまれて前へ進めなくなる様を言い表したものですが、今はあまりナズムという言葉は用いなくなりました。罪というのは、その中に身を置けばぬかるみにはまり込むようなもので、全員が罪になずんでしまうのです。ですから、イエス様はそんな罪の前に誰の罪だとか、彼の罪だとかいわば犯人捜しすることは少しも役に立たないとおっしゃっています。そうではなくて、私たちは、その全員に絡みついてくる罪を、自分から手放しなさいと言われています。

　ここに私たちの行うべき能動の秘訣があるのではないでしょか。私たちを覆っている罪は計り知れなく大きくて、そもそも私たちの手に負えるものではありません。私たちはただ主イエスにすがって、それを赦してもらうしかないのですが、そのような受身の中にも、一点の能動が私たちに示されています。それは各々が今はまり込んでいる罪を手放すことです。絡みついてくる罪を放り投げることです。罪から離れるといってもいいでしょう。

　詩編でこのように歌われています。詩編１３１篇より（旧約９７３ページ）「主よ、わたしの心は驕っていません。わたしの目は高くを見ていません。大き過ぎることを／わたしの及ばぬ驚くべきことを、追い求めません。わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように／母の胸にいる幼子のようにします。」

　私たちは罪という大きなものに立ち向かうことは出来ません。しかしイエス様の愛の内に守られつつ、今直面している一つ一つの小さな罪を手放すことは出来るでしょう。

　２４節からトマスが登場します。トマスはただ疑り深いというだけの人ではありませんでした。ヨハネ福音書１１：１６によりますと、ラザロが死んだときトマスは「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と仲間の弟子たちに言いました。このような悲観的な性格のトマスが、弟子たちの真ん中に立ったイエス様と出会ったのは、少し遅れて八日後になりました。しかもトマスはイエス様の手に釘の後を探し、そこに指を入れてみたいと考えたのでした。イエス様の姿を見てただ子供のように喜んだ他の弟子たちとは大いに違いました。そもそも私たちは主なる神の強い御手によって救われたのです。主は強い手をもって私たちを奴隷の境遇から救われて、私たちを絶えず支えておられます。主なる神の御手が、人間の仕業による十字架によって損なわれることはあり得ません。私たちは全能の主なる神が、その手に釘を打たれて、働けないでおられることなど想像することも出来ません。トマスがイエス様の手の釘あとに指を入れようとしたことは、まことに的外れで罪深い事でした。しかしイエス様はそんなトマスの言いなりに、手とわき腹の釘あとをトマスの手のとどくところに近づけて見せたのでした。トマスは自分の頭をフル回転させて復活の主イエスを確かめようとしたのでしょう。その試みは執拗に彼の頭から離れ去らなかったことでありましょう。彼は自分が納得しない限りその試みを止めようとはしなかったのでした。しかしその時、イエス様の「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」という御言葉がトマスを変えました。彼は罪にナズム者から罪を手放すものへと変えられたのでした。

　さて、今から１００年ほど前、この別府の地で、油屋熊八という方が活躍されました。彼はクリスチャンなので、私たちの兄弟です。彼は湯気が三本立つ温泉マークを日本中、世界中に広め、又地獄めぐりや、日本初の女性バスガイドを発案し、「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」というキャッチフレーズを広く宣伝して、観光客を別府へと呼び込みました。又昭和６年には「全国大掌大会」と称して、手のひらの大きさを競い合う催しをいたしました。それは彼自身の手が巨大だったので、なかなかそれに勝てる相手がいなかったからでありましょう。このように彼は能動的にアイデアと行動力を発揮して、別府の発展のためにくみしたのでした。その行い一つ一つにそこはかとなくキリストの香りを感ずるのは私だけではないでしょう。又彼は子孫に遺産を残さなかったといいます。その代わり、かれのなした業は今でも別府市民の心に残り、讃えられています。

　私は、この熊八兄弟も、イエス様の愛のうちに罪を手放し、そして罪になずまなかった人だと信じます。詩編でダビデが歌ったように、熊八も、大き過ぎることを／自分の及ばぬ驚くべきことを、追い求めず、自分の魂を、幼子のように／母の胸にいる幼子のようにした人であっと私は信じます。大きな手を能動的に使って活躍した熊八兄弟は、それよりもはるかに大きな神の御手によって支えられていたのでした。

　主イエスがなさったヨハネ福音書に書ききれなかった多くのしるしは、今の私たちの眼前にもあふれる程に示されています。私たちはそのしるしを、父子聖霊なる主なる神の信仰によって示し続けていきたいと願います。

お祈りします。天に居ます私たちの父なる神よ、あなたは独り子イエス・キリストを墓の中から立ち上がらせられました。私たちも主イエスを信じ従うものとされ、又立ち上がらせて下さったことに感謝します。このような私たちにとって、全く受身の出来事のうちに、あなたは、聖霊を送られ、わたしたちに絡みつく罪から離れ去る能動を教えてくださいました。まことにありがとうございます。私たちがいつもあなたの愛の御手の内に守られながら、この能動をなしていくことが出来ますように励まし、導いてください。

　ことに今日、この会堂に集えなかった兄弟姉妹を覚えます。彼らが、今ここに集うものと共に等しく、あなたの恵みを受けられますよう、特別のご配慮を切に願います。

　今、医療現場で命を賭して働かれておられる方々の上に、あなたからの守りと慰めとが格別にありますように。父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。